

ピア・チューター制を取り入れた協同学習の実践報告（第1報）

○百々 直子 江崎 智子 関西看護専門学校

キーワード：教科外活動 仲間づくり 動機づけ 協同学習 承認

I. はじめに

昨年度入学後の面接により、自己肯定感が低下している学生が多くいた。そこで学生間のより柔軟な人間関係づくりをきっかけとして、協同学習による学力向上を目指したピア・チューター制を取り入れた学習支援を試みた。その結果、仲間づくりを基盤とした学習が学力向上に繋がった。更に協同学習の何が効果的であったのか調査したため報告する。

II. 研究目的

放課後補講の一環として、昨年度より実施した協同学習の教授方法が、クラス全体の学力向上に影響を与えたのかを明らかにする。

また、学生が協同学習の何が効果的と感じたのかを明確にする。

III. 研究方法

1. 対象：A看護専門学校の1年生98名
2. 期間：2017年4月～11月
3. 実践：4～5月は、放課後補講で積極的に学生同士の交流を図り、学び合う環境を準備し専門基礎分野の終講試験に繋がった。6月は、学生チューターを選出した。7月以降は、仲間と協力して主体的に学ぶ解剖生理グループワーク（以後GWとする）を教科外活動の一環として開始した。ひとグループ4人編成で、グループ毎に一系統の解剖を極め、更にグループメンバー個人が興味関心の持てるテーマを1つ選択した。7月～11月までの期間で、発表の準備（模造紙・模型・画用紙など）と看護語呂・国家試験問題を1人1つ作成した。

発表は、1人ずつ行い、テーマと看護語呂で5分間、国家試験問題と解説で2分間とした。その他の学生は、興味のあるテーマのプレゼンテーションを聴き学習した。内容を聴いた後は、ピンクの付箋には良かった点をブルーの付箋には改善点を発表者に渡した。

4. アンケート方法

成果発表終了後に、無記名自記式のアンケートを行った。内容はピア・チューターの効果をみる①～⑨項目の観点を設け、評価は5段階とした。項目⑩には自由記載欄も設けた。

アンケートの回収数は94/98人であり、回収率は96%であった。その4カ月後にも同じ内容のアンケートを実施した。回収数は、79/94人であり回収率は84%であった。

5. データ分析方法

4月の入学時確認試験と15科目の専門基礎分野の終講試験結果による平均標準偏差（以後SDとする）を用いて、一昨年度と昨年度と比較することで評価した。

解剖生理GWアンケート結果は、評価の高い5・4群と低い3・2・1群の2群に分け、理想値と比較した。更に4カ月経過した後、同じ項目のアンケート調査を行い、上記同様の2群に分け、発表後と比較した。検定は χ^2 検定を用いた。

IV. 倫理的配慮

対象者にアンケート調査の目的及び方法を説明した。アンケートの回答の有無によって学業や評価に関連しないこと、アンケートの記入は自由であり不利益を受けないことを伝え、回収をもって合意形成とした。

V. 結果（終講試験と解剖生理GWアンケート）

表1 4月入学時確認試験と15科目の専門基礎分野の終講試験結果による平均SD比較

	4月入学時確認試験	15科目の専門基礎分野の終講試験
一昨年度SD	14.3	18.3
昨年度SD	15.3	10.7

入学時確認試験において、SDのバラつきは概ね同様であった。15科目の専門基礎分野の終講試験平均SD値からは、一昨年度はバラつきが広がり、昨年度は少なくなっていた（表1参照）。

表2 解剖生理GWアンケートの結果

評価基準	5	4	3	2	1		
アンケート項目	とても そう思 う	そう思 う	どちら ともい えない	あまり そう思 わない	全くそ う思わ ない	発表後 5・4群と3・2・1 群の2群を理想 値と比較	4カ月後 5・4群と3・2・1群 の2群を発表後 の値と比較
①役割と責任	35%	40%	21%	3%	1%	p= 0.001**	p= 0.898
②交流	21%	34%	29%	15%	1%	p= 0.465	p= 0.960
③参加	25%	52%	16%	7%	0%	p= 0.000***	p= 0.117
④貢献	45%	46%	8%	1%	0%	p= 0.000***	p= 0.872
⑤関心	32%	38%	28%	1%	1%	p= 0.005**	p= 0.032*
⑥意欲	22%	40%	35%	1%	2%	p= 0.106	p= 0.424
⑦理解	37%	43%	20%	0%	0%	p= 0.000***	p= 0.833
⑧承認	70%	25%	5%	0%	0%	p= 0.000***	p= 0.002**
⑨環境	28%	32%	28%	9%	3%	p= 0.187	p= 0.874

*p<0.05 **p<0.01 ***p<0.001

発表後のアンケート結果（表2参照）では、有意差（ $p < 0.05$ ）があった項目は、①役割と責任③参加④貢献⑤関心⑦理解⑧承認であった。特に高かったものは、④貢献91%と⑧承認95%であった。

更に4カ月後の結果は、⑤関心⑧承認の項目に有意差があった。

⑩自由記載では、「皆のために放課後残ることは、とても気持ち良かった。先生になった気分になれて楽しかった」「他者の発表を聴き、授業で分からなかったところが理解できて嬉しかった」「分かりやすかったと言ってもらえると自信になった」「終えてみたら友達もできた」等多くの記載があった。

VI. 考察

今回のような教科外活動は、授業中とは異なり休み時間や放課後において、学習を行うことが必ずしも強制されているわけではない。そのような状況の中で、自ら仲間と学習活動を行おうとする意思決定には、学生自身がもつ動機づけのあり方が大きく関わっていると考えられる。

岡田（2008）は、良好な友人関係を基盤として、友人との間で学習に関する相互作用を行い、その経験によって学習に対する意欲や学業達成が促進されていると述べている。表1の結果から、ピア・チューター制により学生自身が互いの役割を担い合い、学び合う関係が学習効果を高

める結果に繋がったといえる。

また表2の結果から、互いに学び合う環境で役割と責任を持って主体的に参加し、より関心を高め、学習の理解を深めていると考えられた。

更に安永（2013）は、仲間の学びが自分の役に立ち、自分の学びが仲間の役に立つことの実感は、自分は仲間から必要とされているという自己感情を高め、自分も仲間と共に学び合えるという自己効力感を高めると述べている。

自分ばかりでなく、他者のためにもという思いが、積極的なGWへの参加となり、学習の幅を広げ理解を深めていたと考えられる。

このころの働きは行動の動機になり、自由記載にあるような、他者から認められたという承認が自信に繋がったといえる。

本校は自己肯定感が低い学生が多いが、⑧承認の項目が95%を示し持続性も高いことから、協同学習の効果が示唆された。

VII. 結論

1. 互いに学び合う環境によって、役割と責任を持って主体的に参加できていた。
2. 仲間と取り組むことで、より関心を高め学習の理解を深めていた。
3. その過程を通して、「他者のために何かをしたい」という貢献意識を高めていた。
4. 解剖生理GWの成果を認め合うことで自信を得ていた。

上記から、仲間づくりを基盤とした学生主体の協同学習が、学力向上に繋がっていたことが明らかになった。今回のGWについて、学生自らが雑誌投稿する行動にまで発展しており、今後は、更に協同学習を受けた学生の思いを知るために、多くの記入があったGWの自由記載の分析を行っていききたい。

引用文献

- 1) 岡田涼（2008）：友人との学習活動における自律的な動機づけの役割に関する研究，教育心理学研究，56，14-22.
- 2) 安永悟（2013）：活動性を高める授業づくり，協同学習のすすめ，医学書院，70.